

不登校児ら集い10周年

越谷

不登校の児童・生徒らが集まるフリースペース「りんごの木」（世話人・増田良枝さん）が、六月で設立十周年を迎えた。活動場所となつている越谷市内の学習塾には、三、四十人の子どもたちが「自分たちの居場所」を求めて姿を見せる。一日には、十周年記念シンポジウムを南越谷のサンシャインホールで午後二時から開く。子どもたちが、「りんごの木」での笑顔が絶えない「日常」を自分たちの言葉で語る予定だ。

舞台設定は病院。盲腸で入院した高校生の元に、同級生が見舞いに来た。

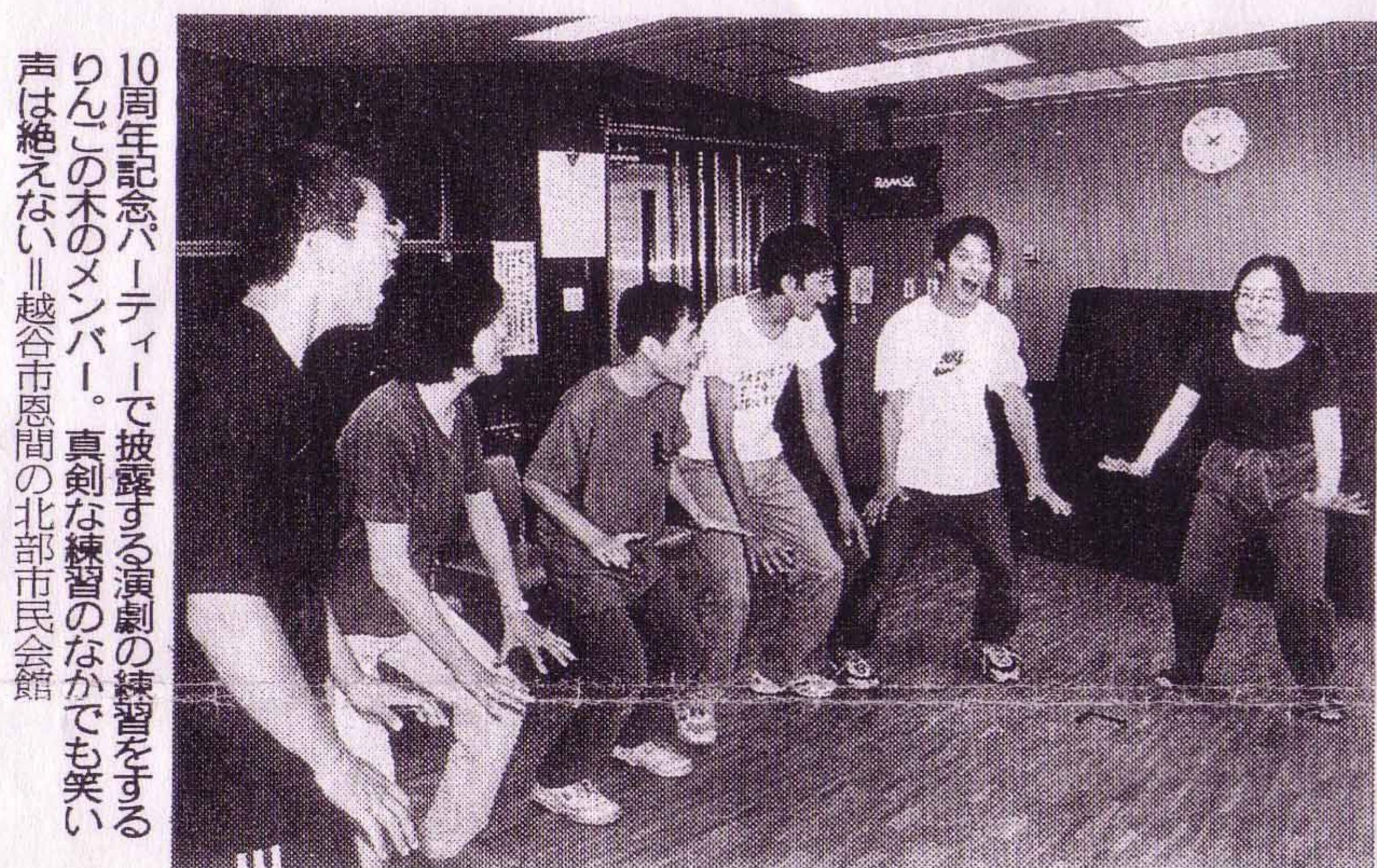
「まだ、傷口は痛む？」
 「笑うとちよつとね」「じや、こういうのはどうだ。寝不足のコックさんが調理場でコッククリ（笑い）」

十周年記念パーティーで披露する演劇の練習風景。

本番を二日前に控え、越谷市北部市民会館の音楽室では、子どもたち十数人とスタッフの増田さん、シーザー夏海さんが、最後の練習に熱を入れる。台本は子どもたちとスタッフのオリジナル。ギャグとアドリブが満載で、笑い声が室内に響き渡る。

「りんごの木」ができたのは九〇年六月。越谷市内

10周年記念パーティーで披露する演劇の練習をする
 りんごの木のメンバー。真剣な練習のなかでも笑い声は絶えない！越谷市恩間の北部市民会館



「りんごの木」

の学習塾で、使用しない屋間の時間帯を週に一、二回借りて活動が始まった。十年前は十人ぐらいだった子どもたちも、今では三、四人ぐらに。年齢は十歳前後から二十歳代まで。不登校の期間は数年から、なかには十年以上という子も。不登校の理由は友達との人間関係、「廊下を走つ

てはいけない」といった決まりばかりの学校生活への反発などさまざま。

「りんごの木」での活動はゲームやスポーツ、時には通信制の高校を利用する人間関係、「廊下を走つ

最近は病院の入院患者に音楽演奏をするボランティア活動をしたり、七月に都内などで開かれる世界フリー

と自分で選ぶことができる」。

増田さんは「『学校に行かななくてはいけない』という主張は分かる。でも、行かない子がいるという現実から始めなければ解決しない」と話す。

増田さんたちは、子どもたちが毎日通うことができるフリースクールの設立を考えている。現在、NPO法人格申請のための準備を進めているところだ。「今の子どもたちは受験などに追いやられ、自分と向き合う時間がない。いつたん立ち止まって悩み出すると、悩む時間は人それぞれ。数日で済む子もいれば、何年も悩み続ける子もいる。そんな子たちに『悩んでいいんだよ』といえるような場を保証していただきたい」